特集●すべての道はローマに通ず

賢い政府と自由競争

原田　泰*

Wise Government and Free Competition

Yutaka HARADA*

＊大和総研チーフエコノミスト　Chief Economist, Daiwa Institute of Research Ltd.　原稿受理　2004年５月17日

エコノミストは、尋ねられた経済問題には答えるのが仕事だから、関心を持たなければならない分野はいくらでも広くなる。とはいえ、専門性は保っていきたいと常に思っている。経済情勢はもちろんだが、最近では金融問題、中国経済、少子高齢社会についての発言が多くなっている。日本の人口が減少していくときには、厳選されたインフラしか有効なものとならない。有効なインフラについて考えるために、本誌の企画は大変有益だった。

すべての道はローマに通ずという言葉は小学生でも知っている。それほどに道、さらにはインフラストラクチャーの建設に情熱を傾けたローマに学んで、今日の日本のインフラのあり方を考えてみようとは、なんとも洒落た企画だ。すぐさま引き受けてしまったが、『ローマ人の物語』の塩野七生氏と格闘するのはなかなか難しい。書評するとは、書いていないことについての注文と書いてあることへの疑問を述べることになるが、練達の文章家である塩野氏は書評子が通常思いつくような注文や疑問に、すでに十分に答えてしまっているからだ。

敗者への恩恵を与えるインフラ

中国は長城を作り、ローマは道を作ったと著者はいう。異民族侵入に対して異民族を隔てる防護壁を作るのではなくて、軍隊を機動的に動かすための道を作ったのがローマである。もちろん、目的は軍隊の機動力を強化することだけではない。交通の確保は商業を発展させ、商業の発展はローマの支配を恩恵と感じる人々を増大させる。そして、そう感じる人々を増大させることが、ローマの安全保障政策であったという。

確かにローマの支配は恩恵を与えた。ギリシアの哲学者は、「ホメロスは謳った。大地はすべての人のものである、と。ローマはこの詩人の夢を、現実にしたのである。あなた方ローマ人は、河川には橋をかけ、平地にも山地にも街道を施設し、帝国のどの地方に住まおうと、行き来が楽になるように整備したのである。人種が違おうと民族が異なろうと、ともに生きていくに必要な法律を整備した。これらすべてによって、あなた方ローマ人は、ローマ市民でない人々にも、秩序ある安定した社会に生きることの重要さを教えたのであった」と書いているという。

これは永続的な帝国支配の要諦であろう。多数が少数を支配する帝国ではなく、少数が多数を支配する大帝国では、敗者を同化し、敗者ですらも帝国の恩恵を感じるようでなければ、長期支配は不可能だろう。著者は、ローマのインフラはそのような装置でもあったという。敗者は、ローマのインフラの壮麗さとその実用性の両面に感嘆することになる。かつて地中海に帝国を打ち立てようとして破れたギリシアの歴史家、文人、地理学者たちはみなローマを褒め称える。「ギリシアでは全盛期のアテネでさえも関心を持たなかったのに、ローマ人が創造した傑作は三つあり、それは街道、上水道、下水道の完備である」と。ローマ帝国の属州になるとは、そのような文明の恩恵に与ることだったと著者はいう。

ローマの平和と街道

ローマ文明の恩恵は今も認識できると著者は指摘する。まずは張り巡らした道の規模である。ローマを中心にスペイン、イギリス南部、ドイツ西部、ウィーン、トルコ、イエルサレム、アフリカの地中海岸までである。しかし、人や馬の踏み固めた道ならそれ以前にもあっただろう。驚くのは道の頑健さである。１mから1.5mの深さに掘り下げ、そこに砂利、粘土、砕いた石塊を敷き詰め、表面に１辺70cmの石を隙間なく張り詰める。車道の幅４m、排水溝と両側に３mの歩道付きの道である。排水溝やガー

ドレールを合わせれば12mになる。ここを皇帝の指令や軍団や商人が通った。属州と繁栄を分かちあうとともに反乱や侵入者には軍隊が直ちに差し向けられるように、道路は堅固でなければならなかった。ローマの軍団兵は20万人に満たなかった。その機動性によって、少ない軍隊でトルコからイギリスにいたる大帝国を支配していたという。

橋は道路の延長である。できる限り速く動けるように橋をかけることになる。そこで橋は平らに、軍団の速度を落とさなくてもよいようにとかけられる。川がなくても、道を上り下りしなくてもよいようにと陸橋がかけられた。

国営の郵便制度が整備され、属州の動きはただちに皇帝に届けられた。軍団も通った。ローマの平和が訪れるとともに、普通の人々が街道を通ったという。

人々が旅行していたことを示す地図、宿泊施設や都市の名前とその間の距離を示したコップが大量に販売されていたという。コップならばスペースに限りがあるが、地図には名所旧跡、神殿、宿泊施設、都市が記号によって記されていた。多くの人々が旅行していた証拠であり、街道が人々の役に立っていた証拠であり、ローマの平和が実現していた証拠であるという。

水道については詳しく記述されているが、下水道についての詳しい記述はない。ただ、著者は、ローマの下水道を賞賛したギリシア人の言葉を記している。流しっぱなしの効用は、上水の水質を守ることとともに下水の流れをよくすることにもあったという。ペロポネソス戦争におけるアテネのスパルタに対する敗北の一因として、城壁にこもったアテネの疫病があるのだから、ギリシア人も下水道に関心を持ってもよかっただろうが、そうではなかったのは不思議である。ギリシア人は、戦争においてはプラグマティックな民族であったのだから、なおさらである。

中世都市を悩ませた疫病の記録が少ないことから、下水道の性能がよかったことは確かだろう。西欧において、下水道が復活するのは17世紀である。このローマの遺産については、もう少し詳しい記述がほしかったところだ。

堅固で、有効で、美しい

紀元前３世紀から紀元後２世紀を中心に建設されたローマの街道、橋梁、水道はいまだにその姿を残しており、そのいくつかは現在も実用に供されている。トレヴィの泉の水は、2000年前の水道橋を流れてくるものだという。

本書で紹介されている、ローマの建築法をまとめた『建築論考』には、ローマの公共事業のモットーは、堅固で、有効で、美しい、と書かれているそうだ。ローマ人は、「ピラミッドは無用で馬鹿げた権力の誇示にすぎない」「ギリシアの美術品の素晴らしさは有名だが、人々の日常生活への有効性ならば、皆無とするしかない」とも述べているという。とはいえ、ローマ人は野暮ではなく、ギリシア時代の美術品の収集に熱中し、エジプト観光旅行にも大挙して出かけていたという。

「堅固で、有効で、美しい」とは、公共施設のあり方を示す言葉として最高のものではないだろうか。しかしローマのインフラも、帝国の衰退とともに衰微する。敷石は磨り減り、間には土砂がたまり、雑草が生えたあげくに静かに死んでいく。インフラは、それを維持するという強固な意志と力を持つ国家が機能していない限り、滅びるしかないと著者は言う。

ローマに強固な意志を持たせたのは、その有効性であると著者はいう。蛮族の侵入によって、公衆浴場の水を求める大都市の市民たちがいなくなれば、水道は維持されない。強固な石畳の道を疾走するローマの軍団が弱まれば道は維持されなくなる。平和であればこそ人々が行きかった道はさびれる。

堅固で、有効で、美しいローマのインフラを最終的に支えたものは、その有効性である。有効性を認定するローマの意志がインフラを支えた。ローマのインフラは、その有効性によって世界の賞賛を得たが、日本のインフラは、その有効性にかかわらず作られていく。有効性を認識する国家の意志にかかわらず、人々に仕事を与える手段として作られていく。

日本のインフラは、将来にどのような姿で残るのだろうか。日本のインフラは無秩序に美しい。山奥に場違いなほど豪華な橋を見ることがある。ローマが商業の発展を通して敗者に帝国の恩恵を与えようとしたとき、日本では富を分配する手段としてインフラが選ばれた。日本という国家の富が停滞していくとき、インフラは整備されずに死んでいくだろう。石ではなく鉄で作られた日本のインフラは、おそらく急速に死んでいくことになるだろう。日本のインフラは遺跡にすらならないだろう。

ソフトなインフラ

インフラはハードなものに限られるわけではない。教育と医療も重要なインフラである。街道と水道とは政府の事業だったが、教育と医療は私的に与えられた。ローマは、医療と教育に携わる人々にローマ市民権を与えることによって教育と医療を優遇した。ローマ市民権が得られれば、属州の10分の１税が免除される。ローマ法が適用され、市民として保護される。市民権を得る条件はただ一つ、教育と医療によって生計を立てることだけであったと著者は述べる。

ここでローマが、教えることの資格や、治療することの資格というものを考えなかったのは興味深い。月謝を払って習う人がいる、お金を払って治療を受ける人がいる、という事実だけで十分としたと著者はいう。ローマは、国民の決定能力を信頼した自由主義国家であったわけだ。日本は資格に拘るが、その実体はいいかげんなものである。資本主義の基本的なルールの一つであるべき東証上場資格という資格ですら、ごまかしになっており、ごまかしている企業が、プロ野球新規参入球団の公共性を審査していたわけだ。プロ球団の参加資格は私的なものであるが、公的資格もたいして変らないのが実情ではないだろうか。

ローマ人は、教育も医療も国民の決定権に委ねればよいと考えていた。しかし、キリスト教が広がり、キリスト教が国家の宗教になるとともに、教育も医療も公営化が進む。教師は資格が必要とされ、その資格も信仰の有無で決まるようになる。ギリシア、ローマの古典は追放され、聖書と聖人たちの行伝が教科書となる。公営の病院が建てられ、医療は無料化された。キリスト教の興隆から、教育と医療の国家支配が進む。ローマ帝国が強大であったとき、教育も医療も私営だった。ローマが弱体化するとともに、これが政府の負担となったという。

ローマ帝国は、むしろ伝統的な日本に似ており、社会主義思想と戦後日本がキリスト教支配のローマに類似している。多神教は、敗者の神々にも居場所を与えたが、一神教では、敗者は戦争で敗れた上にその神までを捨てなければならない。江戸時代の教育も、ほとんどが自由な私塾であった。医者の免許制度もなかった。人々の決定権が教育と医療の質を保証していた。戦後の日本は、文化の質の維持を政府に頼るようになる。

キリスト教化されたローマのその後を見れば、教育と医療の国家管理がその質を保証するものではないとわかる。学問は疑いを持つことから始まる。しかし、キリスト教は信ぜよという。キリスト教の学問に対する支配が始まる。疑いを持たない人々の支配によって学問は死滅したと著者はいう。

政府が文化の質を維持できないのは、日本でも同じだろう。教育や医療の質を、政府の統制で維持することはできなかった。学校の秩序は乱れ、大学も医療も、その質はアメリカに劣ることとなった。最近では、大学の独立行政法人化によって、政府の大学への支配権は強化された。教授会の研究費配分は、悪平等と既得権維持にすぎないのかもしれないが、官僚的統制がそれに勝るという証拠もない。必要なのは、政府の統制ではなく、人々の自由な決定権を生かす、分権的な決定ではないか。さまざまな大学が、社会の評価を求めて競争することが、より効率的に学問を発展させるのではないだろうか。ローマの教育も医療もそのようなものであったのではないか。

結語

ここで書かれたハードなインフラについては、有効性を判断できる賢い政府が、教育と医療というソフトなインフラについては、自由競争が必要だというのが、私がローマ人から学んだことだ。では、なぜローマは賢い政府を持てたのだろうか。外敵に対する緊張感が、ローマを賢くしたのだろう。いやむしろ、賢かったからこそローマ帝国を作りえたのだろう。では、外敵との緊張感なしに、日本の政府はどうしたら賢くなれるだろうか。

日本の政府を賢くできるのは、課税の緊張感だろう。過去の成長（考えてみれば、バブルの80年代末まで、日本は成長を続けてきた）により、政府は税収を心配しなくてよかった。その後の十年以上も、デフレにより安心して国債を発行できた。デフレによって金利が下がり、膨大な国債発行にもかかわらず、国債費(利払い費と償還費)は低下していったからだ。日本の政府は、有効性を問うことなく、インフラを作り続けることができた。デフレが終わり、金利が上がれば、政府は緊張感を持てるだろう。

賢い政府を持つことはあまりにも困難なことだから、国家はできる限り多くのことを、人々の決定権に任すべきだというのが、私がローマ人から学んだことである。